

鷹の爪につかまれて

小林守城

唐辛子のことを鷹の爪という  
なんと見事な比喻であろうか  
暮らしの中に生きている  
ぴりりどんぴしゃり  
ゆるがぬ感性におどろき  
豊かな思いにひたる

ちよつと調べてみると  
ウコギ科のイモノキ  
ベンケイソウ科のオノマンネングサ  
唐辛子の一品種  
爪草の別称  
上製の茶の銘などともある

なんとこのうのと  
無知でこられたことか  
歲月よ こんな時に  
わたしの下痢は始まる

詩人は鷹の爪だ  
そうだ そのとおりだ  
詩は本来 その爪や牙を  
上手に隠し持っていなければ  
ならないのだから

言い訳がましい  
わたしの古希のゲリラだ

だが一方生きている現場は  
どきつとするほど直喩なのだ  
唐辛子の辛味が大好きな  
つれあいの女は  
当たり前のようにそのことを知っていた  
少し誇らしげだった

いたずら小僧に戻っているわたしは  
辛いのが酸っぱいのが苦手なわたしは

言葉が好きで詩を書く人が

そんなことも知らなかったの

そう言わんばかりに聞こえてしまう

旭日中授章叙勲の政治家の誇りなど

くそくらえ なにするものぞ

その直喩の厨房の負目引け目を

そつと驚掴みしてひっかくような

つれあいの暗喩にしばしうたれては

わが苦悶の下痢をそれとなく

気付かれまいとするのだった